氏　　名	林　裕　美　子
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博甲第　5205　号
学位授与の日付	平成２７年　９月３０日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科生体制御科学専攻 （学位規則第４条第１項該当）
学位論文題目	Predictive factors for relapse of epileptic spasms after adrenocorticotropic hormone therapy in West syndrome （West症候群における副腎皮質刺激ホルモン療法後のてんかん性スパズムの再発予測因子）
論文審査委員	教授　塚原宏一　教授　淺沼幹人　准教授　北村佳久

学位論文内容の要旨

West 症候群（WS）は年齢依存性てんかん性脳症の一つであり、副腎皮質刺激ホルモン（ACTH）療法が最も有効であるが、半数近くの患者が再発する。我々は定期的な脳波所見を用いて ACTH 療法後のてんかん性スパズムの再発予測因子を探求した。

39 例の WS 患者（潜因性 8 例、症候性 31 例）が対象であり、16 例で ACTH 療法後にスパズムが再発し（再発群）、23 例は再発しなかった（非再発群）。基礎疾患や ACTH 療法終了後のてんかん発射の存在が発作予後に関係するかを検討するために生存曲線を使用した。ACTH 療法終了直後では、基礎疾患のみが発作予後に関連し(p = 0.003)、early stage（ACTH 療法終了 1 か月後）ではてんかん発射の存在のみが発作予後に関連していた(p = 0.001)。症候性 WS に限って同様の統計学的分析を行ったところ、early stage でてんかん発射のない症例は有意に発作抑制率が高かった(p = 0.0091)。ACTH 療法後の定期的な脳波検査がスパズムの再発予測に有用であることが示された。

論文審査結果の要旨

本研究は、多数例を対象に小児の難治性てんかんの代表である West 症候群（潜因性および症候性）の再発を早期に予測する因子を探究したものである。本研究では、ACTH 治療中から定期的に脳波検査が行われ、てんかん発射の動向を評価されたが、early stage（ACTH 治療終了 1 か月後）におけるてんかん発射の存在が有意な再発予測因子であることが明らかになった。脳波を定期的に評価することの重要性とともに、再発予防のための早期薬物介入の有用性が示唆された。この結果は、West 症候群患者の診療において臨床的に重要な知見であり、価値ある業績であると認められる。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。